

6) 左乳房内側に発生した臨床的には炎症性乳癌を疑ったエクリン汗腺腫瘍の1例

菅又 徳孝・谷口棟一郎
 家里 裕・勅使河原修 (小千谷総合病院)
 石渡 隆・横森 忠紘 (外科)
 五十嵐俊彦 (同 病理)
 江村 巖 (新潟大学附属病院
 病理部)

臨床的に局所進行乳癌が疑われた明細胞汗腺腫を経験したので報告する。患者は66歳女性で平成2年4月頃、左乳房内側に掻痒感を伴う皮疹が出現し、同3年4月1日当院皮膚科を受診した。腫瘍は左乳房内側にあり、4.5cm×2.0cm、弾性硬で発赤を伴っていた。皮膚生検で乳癌の皮膚浸潤が疑われ外科入院となった。乳房内側縁の腫瘍のためMG不能、エコーでは境界不明瞭なモザイク状を呈し皮膚肥厚が見られた。又、胸筋への浸潤が疑われた。以上より左乳癌 T₄cN₁bM₀ St III b と診断し、定乳切を施行した。組織学的には大半が真皮内に局限したエクリン汗腺由来の明細胞汗腺腫で脂肪織、乳腺への浸潤は軽微であった。本症は女性に多く、頭、顔、軀幹に好発し、弾性軟〜硬の皮下結節として触れ、被覆表面は紅色〜暗赤色を呈するとされる。本症例は腫瘍の占拠部位から補助診断が困難であった事、皮膚生検などから局所進行乳癌として取り扱われたものと思われた。

7) 乳腺に原発した悪性リンパ腫の1例

姉崎 静記・小山 善基
 武藤 經一・北條 俊也 (新潟県立新発田)
 坂下 澗・中村 茂樹 (病院外科)

乳腺に原発する悪性リンパ腫は稀な疾患であり、触診、画像診断でも特徴的な所見を欠くので、術前診断は極めて困難である。

今回当院で経験した症例は50才の女性、乳房撮影では、良性乳腺腫瘍、超音波画像では乳癌の診断であった。

術前に穿刺吸引細胞診(ABC)を3回施行したが、悪性腫瘍の診断は得られず腫瘍の試験切除による病理組織検査により、悪性リンパ腫(Non-Hodgkin Lymphoma, diffuse, mixed type)と判明した。

文献上、本疾患の診断は殆ど生検または根治手術による標本の組織学的検査で決定されている。しかし、最近ではABCにより悪性リンパ腫を強く疑い得た報告もみられるようになり、当院のABCの成績でもリンパ系細胞が多数みられたことより、鑑別診断に悪性リンパ腫を考慮すれば、ABCと画像診断などの組み合わせによ

り、本症の診断は可能であると考えられる。

8) 生物学的特性から見た神経芽腫マスキリーニングの問題点

—DNA解析の検討から—

広田 雅行・岩瀧 真
 大沢 義弘・内藤 真一
 内藤万砂文 (新潟大学小児外科)

神経芽腫のマスキリーニング(以下マスと省略)は、本県では1985年に開始され、HPLC法の導入による精度の向上で早期症例が発見されるようになり、化学療法の進歩と共に予後の改善につながるものとして期待されている。今回我々は、DNA Ploidy, N-myc と病期、予後等の面からマス発見症例と、その他の症例を比較検討し、マスの問題点を検討した。[結果]マスで発見された16例(病期I, II, IVSの予後良好群が10例)では、全例DNA PloidyがAP(Aneuploidy)で、N-mycも検索し得た全例が増幅を認めず、全例生存している。一方、マスで発見されず、後に発症した症例10例ではAPは5例で、この内1例のみが病期IIであった。DP(Diploidy)の5例中3例でN-mycの10倍以上の増幅を認め、DPの2例とAPの1例が死亡している。又、マス施行前の病期III, IVの26例では、AP12例中8例、DP14例全例が死亡していた。マスでのDP症例の発見の可能性とAP症例の検討が今後の課題である。

9) 根治手術が可能であった食道原発悪性黒色腫の1例

金田 聡・和田 寛治
 田島 健三・松田由紀夫
 若桑 隆二・岡村 直孝 (長岡赤十字病院)
 名村 理・八木 伸夫 (外科)

食道原発悪性黒色腫は比較的稀な疾患であり、その報告例のほとんどは腫瘍形成型である。我々は食道壁内に浸潤した症例に根治手術を施行し得たので報告する。

症例は、45歳男性で、平成3年6月頃より水分摂取時の咽頭部違和感が出現し近医受診した。上部消化管内視鏡を施行したところ胸部下部食道に黒緑色の粘膜下の色素沈着を認め、組織生検では悪性黒色腫が疑われた。

全身の皮膚など他の部位には同様の色素沈着を認められず、食道原発悪性黒色腫と診断した。8月19日当科入院し、8月26日食道癌手術に準じ右開胸開腹、胸部食道切除再建術を施行した。手術摘出標本の肉眼所見は、下部食道を中心に黒色素沈着が散在し、病理診断は、固有